
優太と優華

今井 吉樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優太と優華

【Nコード】

N7836Q

【作者名】

今井 吉樹

【あらすじ】

普通の高校生である俺、加藤 優太。

俺は、ある一つの秘密を持っている。それは・・・

二人で一人

おはよう、みなさん。

俺の名前は加藤^{かとう} 優太^{ゆうた}。

どこにでもいる（はずの）、清風^{せいふう}高校一年生である。

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

失礼。さっきのは気のせいだと思っておけばいい。

「おう、優太。調子はどうだ？」

そう話しかけたのは、友達、というより親友といったほうがいいぐらい仲がいい渡辺^{わたなべ} 博樹^{ひろき}である。

「ああ、なんとかな」

「もしや、今日も・・・ 母さんに起こされたのか？」

「ははは・・・」

我ながら、恥ずかしいものである。

（・・・・・・・・・・・・・・・・）

すまん、また時間をとってしまった。

こういうのは・・・ おっと、まだ話すべきじゃないな。

「早くしないと、チャイムがなるぞ」

「分かっているよ」

こうして、俺たちはすぐに教室に駆け込んだ。

そして昼休みの時間、俺と博樹は屋上の扉の前で昼食をとっていた（完全に上がったら刑罰物なので）。

ここは、階段側から見るとちょうど死角になっていて、ここで食べている俺たちに気づく人はほとんどいない。そのため、ここが俺た

ちだけの穴場となっている。

その時、博樹が弁当を食べながら、こう言ってきた。

「そういえば、優華の調子はどうだ？」

「優華ね・・・」

優華とは・・・ 単刀直入に言うなら、俺のもう一人の人格だ。

何故、俺が主人公に選ばれたのか考えると、これが一番かつ、衝撃的だろう。

優華が俺に宿ってから、もう十年が経とうとしている。

と言っても、一度も優華に変わった事がない為、自分では潜在意識の一部と思っている。

「分かった。今呼んでくる」

「フゥー、さっすが優太」

『ということは、そろそろ喋ってもいいってこと？』

（ああ、今から許可する）

『やった！』

（ただし、こっちの話だけにしろよ）

『分かってるよ』

括弧が三種類出てきて困ったかもしれないが、今から見分け方を教えよう。

まず、普通の「」が俺の普通のセリフ。主に普通の人物との会話時に使う。

この（）は俺の心のセリフ。ここでは心情を表したり、優華との会話時に使う。

そして、『』が優華のセリフ。基本、俺にしか聞こえない。

『可愛そうな私・・・』

（しかたない事だ）

「おい、優太。そろそろ、こっちの話に戻してくれないか？」

「おっと、すまない」

あっちに話すときは、現在の時間を使うため、よく会話を忘れる事が多々あるが、今回は問題ない。

「じゃあ・・・優華の身長はどれくらいだ？」
「おいおい」

優華は単なる意識でしかないんだ。
体軀は関係ないだろ。

「生きてたときでいいから」

「えーと・・・」

『たぶん、1mはあったような・・・』

「そうか。じゃあ、1m・・・5cm？」

「そこから逆算すると、今は1m60cmあると予想する」

「そんな予想のために身長を教える必要があったのか！」

『そんな予想、外れるに決まってるよ！』

「優華も怒っているぞ」

「分かったよ」

まったく、隙があればこうだ。

相手が意識の中とはいえ、セクハラ行為だろ？

『十分、被告人は有罪です』

了解。後でこてんぱんにしてやる。

キーンコーンカーンコーン・・・

こうして俺の、否、俺たちの一日は過ぎていつている。

そして家へ帰ると、俺の母が出迎えていた。

「おかえり、優太」

「ただいま」

ちなみに、二重人格だと知っているのは博樹だけで、母はこのことを知らない。

「ご飯の用意、出来てるわよ」

「分かった、今から食べる」

こうして、夕食をとり終えた俺は、風呂に入っていた。

すると、優華がこう語りかけてきた。

『私、朝から頭が痛くて・・・』

（そうだったのか!？）

『ごめん。迷惑かけたくなって・・・ そっちは?』

（全くなにも・・・）

俺たちの場合、人格の一方が痛みを感じても、もう一方は何も感じないことがほとんどだ。

例外は・・・ 後で。

『そうだよね・・・』

（ああ、いつもの事だ）

『でも、何かが違うような・・・』

？ 何を根拠に・・・

『無いけど・・・ でも、そんな感じがするの』

（そうか・・・）

『優太。そろそろお風呂から出たら?』

「分かったよ、母さん」

俺は母さんの忠告に従い、風呂から出て、自分の部屋へといった。

「えーと・・・ これって、どう訳すんだっけ?」

『どこ?』

（このあたりなんだけど・・・）

問 This mechanical pencil that
you use is mine.

『ああー 「あなたが今使っているシャープペンシルは、私のものです」 だよ』

（センキュー）

俺は勉強の時、ずるいが、優華の力を借りる時がある。

みごとに得意分野が分かれているため、都合がいいのだ。

『ずるには、変わらないよね?』

確かに、変わらないが・・・

『それとこれ、中三レベルの問題だよ?』

(そうだったのか?)

『・・・ そうだよ! ちゃんと勉強しなさい!』

「そういうなら、お前だって三角形の相似条件を知らないだろう?」

『ほえっ? えーと・・・ 3組の辺の比が等しい・・・』

(2組の辺の比が等しく、その間の角が等しい。

2組の角がそれぞれ等しい、だ)

ちなみに、これも中三レベル。

俺たちは極端なまでに分かれているのだ・・・

『さっき変だったけど、どうしたの?』

(ばれたか・・・っ!)

『頭が、痛いのか?』

「そうなんだ、優華」

風呂から出た直後から、頭に痛みを感じていたが、さっきはかなり痛かった。

そろそろ、優華との会話をやめておこう。精神を使うから。

(じゃあ、また明日な)

『うん、また明日』

こうして、俺はベットに横になることにして、夢の中へ入っていった。

『優太・・・』

その体は、私たちのもの。

使わせて・・・』

朝、目がさめて・・・？

次の日、俺は寝心地の悪い朝を迎えていた。

何せ、まだ頭が痛いからだ。

それに、体が少し重い気がする。

何故だろうと思ったが、その訳はすぐに分かった。

「頭がいてえ・・・？」

この時、何故か高い声が出ていた。

俺ではないとすぐに思ったが・・・

「誰！？・・・えっ？」

その声は、本当は俺自身から出ていたのだった。

そして、よくみると、俺の体ではありえない変化が起こっていた。

まず一番に、胸がふくらんでいる。俺は男のはず、まずありえない事だ。

次に、髪が伸びている。俺もクラスの男子では長いほうだが、今の長さならポニーテールに出来るだろう。

そして最後に、俺の大事なものの感触が無くなっている。

この三つの条件より、俺が出した結論は・・・

・・・女になっている・・・

これしか言いようが無い。

俺はすぐに、優華を呼ぶ事にした。

（おい、優華！）

『むにゅ？ 何、優太？』

ちなみに、心の声は変わっていない。

（見ろ、この体）

『うわっ！ 女だったんだ！』

(違うって！ つっ！)

『大丈夫？』

「なんとかな」

頭痛のこともあり、なかなか話が進まない。

そんな時だった・・・

「優太！ 早くご飯を食べなさい！ 学校に遅刻するわよ！」
母の声が階段から聞こえてきた。

『やばいよ、優太』

(ああ、分かってるよ)

そう言った後、すぐに部屋の鍵を閉めた。

幸い、俺の部屋には鍵がついていて、中から閉められるようになっていた。

『良かったね』

(それより、次の問題だ)

そう、いきなり体が変わると、たくさん問題が出てくる。

「まずは服か・・・」

これは、優華と相談してらしい服を探すしかない。

(どれがいいかな・・・)

自分のダンスにはたくさんの衣装があるが、やはり、女らしい服は見当たらない。

『その、黒いTシャツとか似合うんじゃない？』

「他の服よりかはましか・・・」

俺は、優華のすすめた服を着ることにした。

しかし、体が変わっているため、かなり着づらい。

(胸がじゃまだ・・・)

女の体が、こんなにもつらい事に気づいてしまった、男である。

『着づらい？』

(頭痛と相まって、かなり)

『頑張れ』

（放任主義か！）

せめて、女として応援しろ。

なんとか着替えた俺は、次の問題を調べた。

「次は・・・」

「優太！遅刻するわよ！」

「・・・俺じゃないように見せないと」

『まず、その口調を女らしくしたら？』

「出来るか！」

「優太？誰か居るの？」

しまった、母に怪しまれた。

『反省しなさい』

（分かってるよ）

それよりまずは、部屋に俺の他に、もう一人居るようにみせないと。

『脱いだ服を、布団の中に入れたら？』

（なるほど。俺が、風邪をひいているようにみせるのか）

『そう』

早速、優華の言うとおりに、自分のパジャマを布団に挟むことにした。

『でも、人間らしさがないと・・・』

（なら、いい物がある）

そう言いつつ、俺はパジャマを、部屋の中にあっただぬいぐるみとポスターに着せた。

『やるじゃん、優太』

「だろ？」

『でも、何のポスター？』

それは、後で聞いてくれ。

「さて、これで十分かな？」

『後片付けすれば、ばっちりだね』

（ふう、後はどう母さんを・・・つう！）

『んっ？大丈夫？』

（何故か一瞬だけ、頭の痛みが増したのだが・・・）

『えっ？』

優華がやけに驚いているようだが・・・

「つう！」

『やっぱり・・・』

何が『やっぱり』なんだ？

『そうか。これが体につながっているんだ・・・』

（どうしたんだ、優華？）

『優太。ちよつと、私のいる所に行きたくない？』

（ちよつ、だからどういう・・・）

『いくよ、優太』

（だからなん・・・）

そう思った直後、俺を一番激しい痛みが襲ってきた！

「うわあああああ！！！」

『きやあああああ！！！』

この痛みを表現するなら・・・

まるで、『中から何かで突き刺されたような』、そんな表現がぴったりの痛み・・・

隠すための嘘

その頃、彼らの母はその声を聞いていた。

「誰かいるの？ 入るわよ」

母が決心して入ってみると、そこには一人の女の子がいた。

「あら？ あなたは誰かしら？」

「えーと…… 私は、さいとう 齊藤 りか 里香と言います」

「齊藤さん…… ああ、うちの優太がお世話になってます」

「こちらこそ、お母さんに会えて嬉しく思います」

「でも齊藤さん、どうしてここに來たのですか？」

「…… 優太君が、風邪を引いたと聞いたので、見舞いに來ました」

「あら、そうだったの」

この時、母はベットのほうに目を向けたが、特に異常はなさそうと判断していた。

「じゃあ、どう？ ご飯を食べてないなら、ここで食べますか？」

「はい、喜んで」

「ごめんね、これぐらいしかないけど」

「いえ、十分です」

今日の朝ごはんは、食パンとコーンスープという、かなり質素な物だった。

が、彼女は喜んで、どこるか嬉しそうに食べていた。

「……」

そして、一見無言で食べているようだが、顔が少しにやけている。

「どうしたの？ 何か詰まった？」

「い…… いえ、何にも……」

よく分からないなあ。と思いつつ、母は朝食をとっていた。

(ちよっ、これ、おいしい！)

『これが十年の味覚の差か・・・』

(んっ、どうしたの？)

『嘆いていた』

(ふーん・・・)

これで気づいた人もいるだろうが、俺たちは見事に『入れ替わった』のだ。

経緯は・・・今は時間が無いので話さない事にしよう。

(それで、どうする？)

『これから、だな』

確かに、今は上手く騙せているが、問題は明かさないといけない。明かすタイミングが重要なのだが・・・

(今はさぼろうよ)

『お主も悪よのお』

(優太こそ)

「そろそろ、急がないといけないんじゃない？」

「あっ、そうですね」

「じゃあ、お世話になりました」

「こちらこそごめんね。優太の様子に気づけなくて」

「後は、頼みます」

「学校、急いで行ってね」

「はい」

私は、玄関の棚からこっそりと自転車の鍵を取って、そう言いました。

そして、すぐにそれに合う自転車を車庫から出してきました。

この自転車、優太君のじゃなくて・・・

「ちゃんと制服に着替えて、学校にいったよね」

「は・・・はい」

それぐらい分かりますよ。

そして残念な事に、今から私たちはサボりに行くんですけど。

『そういや、このカッコについて説明してないけど・・・』

おっと、そうだった。

一話にあったこの定義、早くも崩れちゃいました。

今は「」が私、加藤 優華の普通の会話、○が私の思考、そして、

『』が優太のセリフになっています。

『俺が説明した意味が無い・・・』

(いいじゃん、てっとり早くて)

(じゃあ、どこに行く?)

『やっぱり、あの山だろ』

(ああ、東山)
あずまやま

『正式には天理山らしいが・・・』
てんりさん

「んなことは気にしなーい」

『気楽・・・』

(何かいった?)

『いえ、何も』

でも、あの山が私の終わりであって、私たちの始まりになるのです。

『んな予告するなよ』

「失礼」

東山で？

私は自転車に乗って、東山の近くに着きました。

「ふう・・・ 疲れたー」

『まだまだこれからだろ？』

（そうだね）

そう、ここからが本題。

私（達？）はここから、2〜3kmほどの山道を登らないといけな
いのです。

『そんなになかったような・・・』

（嘘？）

『今の方が背も高いし、予想以上に早く着くと思うよ』

「ふーん・・・」

私は気を取り直して、山道を一步一步慎重に歩いていきました。

『そろそろだな』

（本当に、早く着きそうだね）

『だろ？』

たまには信じてみてもよかったかな。

そう思ったその直後、私の目の前にすばらしい光景が広がってきま
した。

「うわぁ・・・ すごい見える・・・」

そこは、街が東側と西側に広がって、建物とか建物とか建物とかが
ありました。

『全部建物じゃないか！』

（ごめん、上手く表現できないよ・・・）

そして、その間を別の山が遮って、まるで別々の世界にあるような、

そんな感覚を感じます。

私の登った東山は、二つの市にまたがってそびえています。
私の今いる位置から西側に見えるのが、私達の住む光条市。こうじょう東側に
見えるのが、音羽市おとばねです。

『あっちのほうの友に会いたいなあ・・・』

「そうだね。最近、連絡すら取ってないから」

（まあ、あっちが忘れてる可能性もあるけど）

『駄々漏れだぞ』

（すいません、そうでしたね）

私の考えていることは、基本、優太にもばれています。
ただし、その逆もしかり。

『そのせいで、あらぬ誤解をされそうだったよ・・・』

「ああー あったね」

『お前のせいだろ』

（あっ、そうでした・・・）

ここからは、俺（優太だ）が一年前に起こった事件を説明しよう。
俺がいつものように友達と会話をしていたとき、とあるイケメンさ
んに出くわした。

「おい、アイツまた女に囲まれているぞ」

「ったく、いいかげん女を渡してほしいわ」

「そうだよな。俺の彼女も、付き合いながらもあいつに夢中だしな」
そう影で悪口を言い合っていたときだった・・・

（・・・あれっ？ 何故顔が熱く・・・？）

「おい。お前、顔が真っ赤だぞ・・・」

「はあっ?! そんなわけ・・・」

調べてみたら、まさしくの顔をしていた。

「おーい、こいつホモだったぜー!」

「ちよつ、あらぬ噂を広めるな！ こっちだって迷惑だ！」

その後、騒動が一段落した後、その事について優華に相談してみる
と・・・

『ごめん。私、あのイケメン君にやられたみたい・・・』

（騒動の原因はお前か！）

『本当にごめん！ あまり見ないようにするから！』

「ったく、優華もあのイケメンにやられて・・・俺は誰と協力す
ればいいんだ？」

『里香さんとかは？ 協力できたら嬉しいでしょ？』

「彼女かぁ・・・ って、本当の意味で赤くさせるな！」

『あははは・・・』

「あの時は大変だった・・・」

『お前のせいだろ！』

（そうですね）

そう語り合っていると・・・

グウッ

「・・・」

『腹の虫が鳴いたな』

「・・・食べよっか」

ということで、私は買ってきた弁当を食べることにしました。

えっ？ 買う金はあったかって？

家から出るときには、優太の財布をもっていたんだ。

『そう言うと、変な雰囲気になるが・・・』

まあ、優太君の提案なんだけど。

「じゃあ、いただきます」

私は買っていた弁当を食べ始めました。

『そんなに美味しかった?』

(うん。そうじゃないと、声出さないって)

いや、本当に美味しかったから!

『次の日からは普通に食べるよ』

(分かっているって。私を信じてよ)

『優華は俺を・・・』

「分かったから」

はぁ・・・結構疲れる・・・

食べた意味ないじゃん。

『ところで、ここに来たからには、お参りしたいんだけど・・・
どうやって人格を変えるんだ?』

(えーと、そうだね・・・)

俺は優華の説明を一通り聞き終え、準備に取り掛かった。

『まずは、周囲にある壁を調べてみるっと』

俺のいる空間(優華がいた空間)は、広いドーム状となっており、
その壁は柔らかい材質でできているようだ。

(昨日はその壁、硬かったんだよ?)

『そりゃあ、不思議だな・・・』

優華の声は、今は空から降っているように聞こえている。
そして、この壁を触ってみると・・・

「つう!」

(・・・って、なんで知ってやるのよお!)

『ごめん。なんか、仕返ししたくて』

そう、この壁が体の神経の一部らしい(優華いわく)。

『そして、この壁に突っ込めばいいんだな?』

(うん、私はそれでいけたから、たぶん)

『じゃあ、いち、に、さん! ……で突っ込むから
「了解」』

失敗を考えたら、緊張してきた……

『いち、に……さん!』

「うっ……!」

『ぐっ……!』

「……本当に変わった……」

『どうだった?』

(痛みがあるから、むやみには変わらない方がいいな)
『だよね』

無事に成功はしたが、あまりやりたくはないな。

『同じく。で、あそこに行くの?』

「ああ」

(優華がいるのに行くのは、少し矛盾だけど)

『そっか……じゃあ私、ちょっと寝るね』

(そうしろ)

そう優華に語りかけた後、俺は登山道ではない別の道へと向かって
行った……

東山で？（後書き）

カッコの説明、正しくは

「」が主人格のセリフ。

○が主人格の気持ち・思ったこと。
『』が別人格のセリフです。

次は彼らがこうなった経緯を書きます。

東山で？（前書き）

一月ぶりとなってすみません・・・

東山で？

俺達（？）は、山の奥の方にある小川へとたどり着いた。

「さて、『供養』を始めるか」

『って、本人がここにいますんですけど』

（体の方だよ）

『・・・そっか』

俺はそう優華に語りかけた後、小川の向こう側へと渡り、白い花を一輪とった。

そして対岸から来たほうへと戻り、その場でさっきとった白い花を川に流した。

こうするのにはちゃんとしたわけがある。

『ごめんね。私がわがまま言ったばかりに・・・』

「もう遅いよ。それに、こうして俺の中で生きているだけで満足だよ」

『ありがとう、優太君』

あれは、十年ほど前のこと。俺と優華が五歳の時の話。

俺と優華と、父さんと母さんとで、この東山に登ったときだ。

『優太君、あっち行きたい』

『あっち？ 分かった、一緒に行こう』

『本当？ ありがとう！』

俺たちはいつの間にか、森の奥深くに向かっていた。

この時は、まだ子供だったから危険だとは思ってなかった。が、それが不幸の始まりだった・・・

『うわぁー、綺麗・・・』

『うん、本当にそうだね』

『あの向こうの花、採りたーい。いいでしょ?』

『うん』

『よぉーし!』

と、意気揚々と優華が花を採りにいった。

『採れたよー』

『持ってきてよ、それ』

『はーい!』

と、優華が元の岸に戻ろうとしたときだった・・・

『きゃっ!』

『優華!』

彼女は途中で滑ってしまい、そのまま水に流されてしまった。

『****ちゃん・・・!』

『優華ー!』

このときの俺は、なす術も無く、ただ流れる優華を見ることしか出来なかった・・・

その後、正式に彼女は『死亡した』扱いとなり、厳粛に葬式が行われていた。

無論、俺も悲しみにふける一人、もとい、一番悲しんでいたかもしれない。

「ごめん、優華・・・」

その式の途中、俺は妖精のように、

『起きてる、優太』

と、俺を呼ぶ声を聞いていた。

（お姉ちゃん、誰?）

『私?・・・私は、優華だよ』

（えっ!?）

『これからも、よろしくね』

(優華ちゃん、ありがとう)

このことに気づいたときから、俺は優華と話すようになり、彼女も一人(?)の姉として、友達として俺を見守ってきていた・・・

しかし、現実には甘く行かないのがこの世の定め。

その後、父と母は離婚し、俺は母の元にすった。

父の行方は分からない。というより、最近では意識もしてなかった。

一概に優華のことが原因とは言えないが、一つの大きな欠片^{かけら}だった事は間違いない。

父がいたことを知る術は、今となってはアルバムと、父さんが大事にしていた自転車のみ。

幼い頃は、よく父と一緒にサイクリング(といっても、1km程度だが)に出かけていたな。

んでもって、その自転車を使ってここまで来たのだが、怒られないだろうか。

・・・まあ、本人がいないなら意味は無いのだが・・・

(そういえば最近、優華がよく父さんのことを言ってたなあ)

『んっ?　どういう意味?』

「何でも」

『教えてよおー!』

「しかし、どうして俺に宿ったんだ?」

『話変えないで・・・でも考えたら、私もよく分からない』

まあ、この際放って置こう。いろいろ考えるときりが無い。

と、思ったそのとき・・・

ピリリリリリ！

「うわっ！」

突然、俺の携帯が鳴り始めた。

『出ない方が、いいよね？』

（そりゃ、そうだろう！）

今の意識こそ俺だが、声は女の子のそれである。もし出たら、絶対に疑われる。

『まあ、そろそろ告白するときだってことだね』

「・・・帰ろう」

俺はそう空に言い、この東山から下りることにした。

そうして、家へ帰っていく間、私たち（あっ、変わりました）は、近所の公園で言い訳を考えていました。

（どういえばいいのかなあ？）

『知らないよ。普通に言ったら、絶対信じてもらえないだろう？』

（だよねえ・・・）

はあ・・・ このままここにいようかなあ・・・

『するとて、俺は早く帰ってくるほうだぞ』

（そっか）

つまり、あまりにも遅いと逆に疑われてしまうわけで・・・

「もうっ、どうすればいいのお！」

『声でかいって』

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「へっ？」

気づかなかったけど、私の近くに、一人の幼い子供がいました。

「何か困ってるの？」

「うん・・・ 詳しくは言えないけど・・・」

「お姉ちゃん、そんなに難しいことなの？」

「うん。たぶん、知ってる中では私だけにしか・・・」

「どうして、困ってるの？」

「詳しくは言えないって「言わないと針千本のーます！」

(・・・はあ・・・)

ちよつと面倒になっちゃった。

『途切れ途切れ、話してみたら？』

(そうだね)

「実はね・・・」

私は虚実織り交ぜて、お母さんと喧嘩して、一人で家出していた。つていう風に変えて相談しました。

「どうしてお母さんと喧嘩したの？」

「ちよつと、すれ違いがあつて・・・」

「じゃあ、お母さんに、素直に『ごめんなさい』つて言えば、いいと思うよ！」

(あっ・・・)

そっか。やつぱり、お母さんを信じて、素直に話そうかな・・・うん。きつと、分かってもらえるはず！

「そっか。ありがとう、私の話、聞いてもらつて」

「ううん、お姉ちゃんからも、いい話聞けたよ」

「私、頑張つてみる！」

「頑張つてね、お姉ちゃん！」

私はこうして、素直に決着をつけるため、自分のお家に向かいました・・・

私は自分の家の前に帰ってきました。お母さんに真実を語るためです。

でも、本当にお母さんに信じてもらえるかなあ・・・

でも、やってみなきゃ、分からない!

私は意を決して、玄関を開けました。

「あら? あなた・・・ 里香さんね」

「えーと、あのお・・・」

「優太の迎えにk「違います!」

「じゃあ、どうして・・・」

「・・・謝らないと、いけないことがあります。」

私は、斉藤 里香ではなくて・・・ 加藤 優華、あなたの娘です」

「えっ!？」

告白の後・これからの生活

「フゥー」

私は今、家の風呂でたっぷりくつろいでいるところです。

（にしても、やっぱり信じてみるべきだね）

『ああ。あっさり分かってくれたもんな』

「私は、加藤 優華。あなたの、娘です」

「えっ!？」

私の突然の告白に、すごく驚いているようでした。

やっぱり、だめかなあ・・・

「・・・本当に、あなたなの・・・？」

「嘘はついてないよ、お母さん」

そのまま固まる母さん。数十秒後、こう続けました。

「優華、どこに行ってたの？」

「まあ・・・ 本当ならここに居るはずはないんですけど」

「じゃあ、どうして？」

「ずっと、優太の中に居たんです」

「・・・」

「・・・信じられない、よね？」

その後私は、こうなった経緯、今までの生活、今日起こったことなどを話しました。

たぶん、30分はかかったと思う。

そして全てを話した後、私は改めてお母さんに言いました。

「ねえ、お母さん。こんなことでも信じられる？」

「・・・・・・・・ ええ。あなたが言ってるから、間違いないわ」

「・・・本当に？」

「ごめんなさい。きっと、優太はあなたのこと大切に思っていたのでしょう？」

気づけなかった私は、馬鹿ね」

「そんなことないって！」

普通に考えたら、絶対にわからないから！

「でも、私も心ではそう思ってたのに・・・ごめんね」

「もういいよ、母さん」

聞いてたら、こっちが悲しくなっちゃうよ・・・

「そうね。お家に上がっていいわ、優華」

「うん、そうだね」

そして、私は大きな声でこういいました。

『ただいま』って。

その後、私はお風呂に入って、のんびりくつろいでいました。

『これで、ひとまずは一件落着だな』

「一週間したら学校かぁー 楽しみだなぁ・・・」

『って、学校の様子知ってるだろ？』

（この体で会ったこと無いじゃん）

『まあ、確かに・・・』

女の子の体での反応、気になるなぁ・・・

『でも、男に襲われそうな気も・・・』

（もしそうになったら、あんたの責任ね！）

『嫌、自分の責任だろ！』

「あはっ☆ そうだね」

『この☆（ほし）はなんだ』

（いいじゃん）

でも、そっか。男どもは皆、Hいことしか考えてないし。^{エッチ}

あの馬鹿に何されるか分からないし。

「でも、学校かぁ。私も、一生徒としていけるんだぁ」

『そういえば、小学校上がる前に・・・だっけ』

（そうだよ。本音を言えば、もう少し生きたかったけど・・・）

『でも、今優華はここに居る。それだけで十分だ』

（ありがとう）

優太君、優しいなぁ・・・

私、人にそんなに優しく出来ないかも・・・

『ううん、そんな事無いよ。優華も慣れれば、優しくなれるって』

（そうだね。これから頑張ろう。後、制服も楽しみだね!）

『どうして、今更?』

「女の子のだよお? 嬉しくない? ねえ、ねえ」

『嬉しくないわ! って、いつからそんな風になった!』

（全部はあんたのせいだよ!）

『・・・確かに認めるが・・・』

そんな話をしてたら・・・

「優華! ? そろそろ出たら?」

「あっ、はい」

『救われた・・・』

（内心、邪魔が入ったとか思ってた）

『思ってたなんて!』

（オッケーです）

私はお母さんの言うとおおり、お風呂から出ることにしました。

その時、家を見る謎の影が一つ・・・

「カテゴリー、ランク4th。適応を確認」

『そうか。彼、否、彼女はどれだけ耐えてくれるかな?』

「うーん・・・ 一応、半年に設定しているけど・・・」

『彼女の願いがあるからな』

「彼女にしてみれば、あれはまさしく『悪魔との契約』だね」

『では、引き続き調査を。 後、例のランク4も頼むぞ』

「ああ、彼女のことかい？ 大丈夫さ。彼女は今頃、アレに溺れているさ」

『まあ、彼女に関しては、元々そうなりそうな体質だったからな。彼女も適応できれば、すぐに回収を』

「分かったよ」

そういった後、『少年』は忽然と姿を消した・・・

告白の後・これからの生活（後書き）

一番最後は、蛇足だと思ってください。

生かすも殺すも自分しだいなので。

転校生 加藤 優華

ピピピピ!・・・

「う、んう・・・」

俺は目覚ましの合図で目を覚ました。

今日から『女子として』の学校生活が始まるからだ。

『おはようございまーす』

(・・・)

『何か言ってよお。せっかく挨拶したのに』

(そんな気分じゃない)

俺はこの体になってから、なかなか疲れが取れない日々が続いていた。

そして、今日も例外ではない。

そんな頃に挨拶されても、疲れが増すだけだ。

『そうですか』

「前にも言った気がするぞ」

『あっ、そうだ』

その会話に、階下からの声が割り込んだ。

「優太! 朝ごはん出来てるわよ」

「分かった、今行く」

『・・・よく「優太」っていえるよね』

(確かに、体つきは女のそれなのに)

一応、母も気を使っている、ということだろうか。

ご飯を食べたら、いよいよ新たな制服に袖を通す時だ。

『着替えは、私にやらせて』

(まあ確かに、その方が時間が掛からないけど・・・)

『はいはい、扉閉めて!』

(やるんかい・・・)

「ぐう・・・!」

『あっ・・・!』

「さーあて! 着替えますか!」

『どれだけ元気なんだ!』

(学校が楽しみで仕方ないの♪)

『まあ、何となく分かる気は・・・』

彼女にしてみたら、初めてその目で見える事が出来るのだから、喜ぶのは当たり前か。

「さて、行こっか」

「優華、荷物は持った?」

「もちろん!」

私は玄関へと向かい、靴を履き、身だしなみをチェックして、外へ出ようと思いました。けど、

「優華、これ」

「あっ、そうだった・・・」

お母さんの手にはお弁当が。

あやうく、お昼に食べれなくなるところだったよ。

そして、改めて扉を開け、外へと出て、お母さんに元気な声でこう言いました。

「いってきます!」ってね。

「すー ふー」

『やっぱり、緊張する?』

(もちろん)

私は今、教室の前で名前を呼ばれるのを待っているところです。
今の設定は、『優太の代わりに外国からやってきた双子の姉』ということです。

『何でお前が姉何だ?』

(こうなったから、仕方ないでしょ?)

と、頭で会話してたら・・・

「では、転校生の紹介しますね」

と、教室に居る先生が言いました。

「加藤 優華さん、入って」

「はい!」

「おお!」「かわいい!」「綺麗!」

『すごい人気だな』

(ある意味感謝)

「はじめまして、加藤 優華です。よろしくお願いします」

パチパチパチパチ・・・

そう言い終わった後、みんなから大きな拍手をもらいました。

「じゃあ・・・ 席はあそこね。見えるでしょ?そこの空いている席」

「は、はい」

私は、言われたところの席に座りました。

と、思ったのもつかの間。

「先生」

「んっ、なあに？」

「この子に、学校を案内したいのですが」

「どうして？」

「たぶん、まだ学校の中とか、詳しく知らないと思うから」

「そうね・・・」

ごめん、中の様子大体知ってる。

でも、役を演じないと・・・

「じゃあ、里香さん。案内してあげて」

「分かりました。優華さん、でしたっけ？　行きましょう」

「う・・・　うん」

という事で、私はまた学校を案内させられる事になりました・・・

『もう、分かってるのにな』

（うん・・・）

でも、仕方ないよね。

学校案内

私たちは、里香さんに付き添われて、校内を巡っているところです。でも、学校の様子は大体知ってるから、案内は結構なんだけど。

それに、帰っても別に支障はないし・・・

「あもう、里香さん？」

「ふふっ、緊張してる？」

「別に、そういう訳じゃないですけど・・・」

「別にいいのよ。リラックス、リラックス」

「あはは・・・」

上手く誤魔化させられた。

確か、里香さんって・・・

（元々、そういうの得意だよね・・・）

『ああ、確かにそうだったな』

というわけで、ここで過去話。

それは、優太が里香さんと共に係をしていたとき。

「ねえ、里香さん」

「んっ、なあに？」

「俺、誰か分かってる？ さっき、一瞬だけ名簿、見てたよね」

「えーと、優太、でしょ？ 合ってるよね？」

「それはさっき見た」話、始まるよ」

「・・・」

『たぶん、嘘だと思うけどなあ・・・』

（俺も、そう思うけど・・・でも・・・）

あの目をされたら・・・無理だよね。

と言うわけで、私は最初に図書室を案内されました。

「ここが、この学校の図書室よ」

「ほー」

あまり訪ねてないから、ちょっと新鮮かな？

「この学校、他の学校より蔵書が多いから。 百科事典からライトノベルまで」

「本当だ・・・」

確かに、ここには『涼〇ハ〇〇の憂鬱』だったり、『テ〇ルズ 〇ブ デ〇〇ィニー』だったり、そういう本もありました。

「さて、次行くよ」

「はーい」

「次は美術室」

「ほう」

目の前にある部屋は確かに、絵画とか、彫刻とか、いかにも作ってそうな感じの部屋でした。

「この学校は、芸術選択で音楽、美術、書道のいずれかをするんだけど・・・」

優華さんは、何がいい？ 優太君は書道だったけど」

「私・・・ 音楽にしたいです」

これは前々からの意見。 私、曲を聴いたりするの、好きなんだ。

『ただ、変なのに洗脳されてるけどな』

（洗脳とか言うな！）

あの曲は神曲だよ！ 分かるよね？

「そう？ だったら、音楽室によらないと」

「は、はい」

「ここが音楽室よ」

私たちは、音楽室特有の重厚じゅうこうそうな扉の前に着きました。

「この扉、すごく重そうだね・・・」

「ううん、別にそういうわけでもないけど」

「そっか・・・んっ？」

その言い方、もしかして・・・

「里香さんって、音楽を選択してるの？」

「ええ。もし希望が通ったら、これからもよろしくね」

「はい」

良かった。もし叶ったら、すごく安心だ。

『彼も頼れよ』

(承知しております)

「フンフン フンフツフツ フンフフフン」

「何？ その曲？」

「さあ、何でしょう。次は、どこに行くの？」

「次は・・・食堂に行きましようか」

「了解」

良かった、追求されなくて。と、思ったら・・・

「ちなみに、それは何の曲？」

「うーん・・・」

やっぱりばれてるか・・・ここは、

(A) 正直に言う (B) 虚実を交える

これ、正直に言いづらいんだよね・・・

『正直に言ったら？』

（仕方ない、一か八かだ!）

「あもう、里香さん」

「何？」

ボーカロイド

「VOCAROIDって、知ってますか？」

「ボウカロイド？ 何それ、美味しいの？」

「・・・」

何でネット文句は知ってて、ボーカロイド知らないの・・・

『そういう人もいるってことさ』

（ううう・・・ 帰って1925聴こう・・・）

「ここが食堂ね」

「ふーん・・・」

前にも何度か行ったことはあるので、あまり驚かなかった。

「・・・やっぱり、普通？」

「うん・・・ まあ、そんな感じ」

一瞬、設定を忘れかけてた・・・

『おいおい』

（でも、仕方ないよ・・・）

少し見たけど、本当に、売ってる物も雰囲気も、普通って感じ（あつ、学校のイメージを悪くしているつもりは無いからね）。

「そう・・・ まあ、そういうものよね・・・」

「？」

何を考えてるんだろう。すっごく気になる

「じゃあ、最後に、とっておきの場所に連れて行ってあげる」

「ありがとうございます」

「敬語はよして。 同じ学年でしょ？」

「そうでした」

「じゃ、ここから上がってゆくからね」

「は、はい・・・」

上の階にあるんだ・・・

一体、里香さんのお気に入りって、どこなんだろう。

学校案内（後書き）

作者が好きなために、優華にボカロ厨の設定を追加。

ちなみに、優太は嫌いなようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7836q/>

優太と優華

2011年11月14日22時55分発行